

Youth Post

ユースポスト

日本青年団新聞

2021
Vol. 2

106巻第2号 発行 2021年3月1日

編集・発行 日本青年団協議会

〒160-0013
東京都新宿区麩ヶ丘町4-1 日本青年館5階
TEL: 03-6452-9025 / FAX: 03-6452-9026
seinen@dan.or.jp / <https://www.dan.or.jp>

福島第一原子力発電所。写真提供：(一財) 消防防災科学センター <https://www.isad.or.jp/>



キャピタルホテル1000 (2011年5月20日、松尾直泰局長が岩手県陸前高田市を訪問時に撮影)



2014年2月、岩手県大船渡市「災害は忘れた頃にやってくる」。
写真提供：(一財) 消防防災科学センター <https://www.isad.or.jp/>



2013年度日青協第2回理事会は福島県で開催。理事会後に県内でフィールドワークを行う。

CONTENTS

2-3 Action

青年世代の私たちにできること (福島県会津若松市)
今できる形で学ぼう (静岡県静岡市)
地元で献血ボランティア (岡山県岡山市)

4 子どもとつながる、社会とつながる

8 リーダーと語る (三輪正義氏)

9 社会教育コラボ (西村美東士氏)



2013年1月、桜ライン311の植樹の様子。



2015年1月、災害臨時FM放送局のりんごラジオ。

「Youth Post・ユースポスト」とは、青年の活動や想いが全国に届くことを願って、Youth・ユース(青年)とPost・ポスト(郵便物)を組み合わせたものです。本紙は、青年や青年団が全国でいきいきと活躍する姿を伝える日本青年団協議会の機関紙・広報紙です。

青年世代の私たちにできること 〜福島県で暮らし、これからを考える〜(会津若松市)

東日本大震災(以下、震災)から10年の歳月が過ぎようとする中、被災地で暮らす青年たちの生活はどのようなふうに変わったのか。長谷川綾さん(30)は「地元のために何かしたい」という思いから福島県連合青年会に加入し、現在会長を務める。震災で多くの犠牲が出た福島県で活動する長谷川会長と、佐藤竜太さん(39)が、今の胸中を語った。



震災によって中学校のプールが割れ、隆起した道路は水浸しになった

■当事者だから伝えられることがある

福島県内の仮設住宅はほぼ撤去され、震災直後の生活はもはやなく、震災前の日常に戻った。長谷川会長は、地元の人間にとっても震災の記憶が風化しているように感じる、と危機感を募らせている。青年会活動を通じて全国の仲間と震災について語る時、「私はどこまで震災を理解しているのか。何もわからず話をしているのでは」という気持ちに駆られる。そこには、自身が福島県民として生きていくからこそ、震災を経験してない人たちに正しく伝えていく役割を果たしたいという想があった。今もなお毎月のように震災遺構を巡り、語り部さん

にお話を伺っている。

る。また、青年会活動だけでなく北会津公民館で活動している「パズル」という若者団体にも所属し、震災の実相を学ぶ取り組みに参加している。

「テレビやネットの情報だけでは、何かが起きたときに対処はできない」と改めて気づき、青年会として防災・減災の活動を実施したいという思いも高まっている。

佐藤さんは仕事の関係で千葉市原市に引っ越しており、休日や青年会事業がある日は地元に戻って、長谷川会長と一緒に活動している。震災以降、社会福祉協議会が主催する災害ボランティア養成講座を受け、有事の際に一人でも多くの命を救う支援ができるよう努めている。佐藤さんは令和元年房総半島台風の被害を直接受けた地域に住しており、あらためて



災害は身近にあることを実感した。

コロナ禍で気軽に会うことを自粛せざるを得ない状況であるが、それでもお互いの情報や地域課題の共有は怠らない。「万が一はいつでも起こると、被災したからこそ実感している。」

■これから先の10年

まずは自分たちが活動する地域から防災を見直したい、と長谷川会長は語る。今の小学校5〜6年生は震災当時1〜2歳で、震災を経験してないのと同じだ。再び大きな災害が発生した時に、子どもたちにもできることがある。次の世代になくためにも、青年会役員それぞれが得た知識や経験を福島県でいかしていきたいと意気込む。

福島県連合青年会 会長 長谷川 綾 ☎090-4042-2878



全国の仲間から届く応援の気持ちが福島の青年の支えだ



塩屋崎灯台で土産屋を営む語り部の元を尋ね、「柵を越えて波が来た」と話を聞く

今できる形で学ぼう

〜被災10年、備えるために〜

(静岡県静岡市)

静岡県青年団連絡協議会

会は、11月22日に地域防災研修を開いた。かつて同会は東日本大震災での被災の様子を自分の目で確かめるために、スタディツアーを開催して現地を訪れていた。近年各地で発生した水害やコロナ禍を目の当たりにした同

会ではこれらを災害と捉え、いつ起こるか分からない南海トラフ地震などの災害に備えようと、杉山和義会長(37)を中心に研修会を企画した。

当日は東日本大震災の被災地から、宮城県青年団連絡協議会会長で蔵王町在住の佐藤和博さん(29)と、



宮城・佐藤さんの一言一詞に驚きの声があがる

平成30年7月豪雨で近隣の岡山県倉敷市真備町が被災し支援活動に携わった日青協・中園謙二会長の2人が、オンラインツールを使って同事業に参加し、地元での体

験や教訓を参加者に伝えた。その後、参加者は6月に改装オープンした静岡県地震防災センターで、防災にあたっての心構えや日頃の備えを学んだ。

静岡県青年団連絡協議会 杉山和義支局員より投稿 静岡県青年団連絡協議会 Mail : shizuokaseinen@gmail.com

地元で献血ボランティア

〜身近にできる呼びかけ〜

(岡山県岡山市)

11月8日、小春日和が

続く岡山市東区にあるスパーにて、岡山県青年団協議会では献血ボランティアを実施した。きっかけは、青年団が所属する岡山県献血推進協議会で知り合った岡山県赤十字献血センターの廣江善男さんよりお声掛けいただいたことだ。

活動中は、青年団役員と役員の仲間を含む7名が一同に赤十字の赤いジヤンパーを羽織り、看板を持ちながら一生懸命に献血の協力を呼びかけた。しかし、買い物を目的に来場する方へ協力を求めるのは容易ではない。その中でも青年の声が届き、耳を傾けてもらった時はとても嬉しく、達成感を感じた。コロナ禍ゆえに不安が募る活動だったが、事前にSNS

で情報を拡散した甲斐もあり、最終的に目標を遥かに上回る47名もの協力があった。喜ばしい結果の一方で、協力を得た方のうち17名は検査基準を満たさないことからお断りせざるをえず、とても残念な想いもした。青年団の赤木督尚会長は、「お願いする立場になると、血液を集める難しさを痛感する。」



みんなの力が、いのちをつなぐ

しかし今後献血のPRに少しでも協力出来たら」と、前向きな姿勢を見せる。国内ではかねてより血液が不足しており、コロナ禍の影響もあり現在は更に厳しい状況にある。地域の安全を根強く支える青年団の活動に、これからも注目したい。

岡山県青年団協議会 赤木督尚会長より投稿 岡山県青年団協議会 ☎086-254-7058

子どもとつながる 社会とつながる

～青年団が子ども事業を行う理由～

いま、子どもたちがコロナ禍で翻弄されている。外で遊んだり体験活動をししたりする場が減少し、屋内での活動を強いられていることを受け、文部科学省が委託事業「子供たちの心身の健全な発達のための子供の自然体験推進事業」（以下、委託事業）を打ち出した。日青協も受託し、全国で子ども事業を展開している。私たち青年にとって地域の子どもたちとは何なのか、なぜこの時代だからこそ子ども事業を行うのか。この記事では、委託事業を通じてわかった子ども向け地域活動の可能性と、その主体を担う青年・青年団の役割に迫る。

FOCUS

◆ 社会活動としての子ども事業

委託事業が公募を開始したのは2020年6月。政府の緊急事態宣言が5月下旬に解除されながら、林間学校やキャンプ等の屋外体験活動が制限されていた。そこで日青協も、青年団が全国の子どもたちのために事業を行い彼女らの笑顔を取り戻すため、本事業を受託し8地域14件で開催することにした。

以前から地域青年団の活動の柱の一つは子ども事業であった。子どもの楽しむ姿を見ることで青年団員は元気や喜びをもらい、地域全体が明るくなった。また、子どもを「地域の宝」として見る眼差しを養い、この子どもたちのためにどんな社会をつかっていくべきか考えるきっかけだった。言い換えれば、子ども事業は青年のための社会活動の一環でもあった。

1月下旬までに、山梨県での焼きいもや星空観察、愛媛県でのウォークラリーや自然観察、栃木県での野外炊飯や木工体験、群馬県でのランタン製作などを行ってきた。岩手県でのスキーや福島県での雪遊び、また滋賀県等でも事業を予定していたが、コロナ禍で計画が一部変更になっている。

◆ 年齢関係なく

体験しながら学び合おう

子ども事業が社会や青年団に求め、もたらしものが改めてわかってきた。山梨県でカレーづくりや焼きりんご体験を行った事業ではカレーを自炊しない家庭や、焼いて変色し軟らかくなったリングを気持ち悪く感じる子ども、マッチを初めて触ったとい



山中湖旭ヶ丘温泉ホテル清溪（山梨県）にて、「富士山の麓であそぼ！」を2020年10月24日から25日にかけて開催（日本青年団協議会）

う子どももおり、家庭環境に差があるからこそ、本事業のような体験活動が重要であることがわかる。また愛媛県では参加者が楽しんで行うことを目標とし、企画を組み立てた大学生自らが子どもたちを目の前にして学びを深めた。群馬県では県内一円から参加者が集ってランタンなどの作品をつくり上げた。さらに栃木県では別れ際に「またオンラインゲームで会おう」と言い合いながら、体験活動を通じてデジタルネイティブ世代としてのバランス感覚を養っているようにも思えた。

このように、子ども事業は子どもにとっても主催する青年たちにとっても学び合いになっていった。地域で青年が活動することで、将来を担う子どもたちを育てながら、自分たちも新たな気づきを得て、次の活動に臨む。このサイクルを、青年団としてこれからも大事にしていきたい。

北方領土の早期返還をめざして

「四島(しま)の未来 心かよわせ 返還へ」

2月7日は北方領土の日です



北方領土返還要求のシンボルマークです

独立行政法人 北方領土問題対策協会

〒110-0014 東京都台東区北上野1-9-12住友不動産上野ビル9F

電話 03-3843-3630 FAX 03-3843-3631

URL <http://www.hoppou.go.jp>



文科省委託事業を受けた各県青年団の座談会

文科科学省委託事業を受託し実施することは、地域で活動するだけでなく、地域のことを考えるきっかけになったり、地元でのネットワークを形成してより幅広く強固な組織づくりにもつながります。コロナ禍だからこそ地元根差し活動する青年団が子ども事業を各地で行う意義はどこにあるのでしょうか。

——なぜ事業を受託して実施しようと考えたのですか。

松田 岩手県では1月23日に、石町でスキー事業を予定しています。岩手の青年団としてもコロナで事業を開催しづらかったので、スキーなら対策できると思い開催することにしました。長谷川 福島県では2月20日から21日で雪遊びを計画しています。コロナ禍だからこそ青年団が何かできるのではないかと思いついた。企画しました。

天笠 青年団は何でもできる団体です。コロナで何もできない状況だったので、やってみようと思いつきました。

森岡 私たちは11月1日に事業を終えました。香川県の青年団から青年団主催の子どもキャンプについて伺った際、過去の青年団事業で育った子どもたちが青年団に入る流れがあると聞きました。また青年団の四国ブロック（地区）としても盛り上げようと、愛媛県南予市から火を付けたくて実施しました。

西村 試行錯誤しながら子どもたちと楽しめる場所づくりができてきたと思います。

——開催にあたり困難な点はありましたか。

天笠 野外活動の内容は時期に左右されますね。直前までどのようにやるか決まっていなかった部分もありましたが、青年団が実施することを大切に、実現することができました。

西村 子どもを迎え入れるので、その体制や対策など、施設の指導に従いながら気を配りました。また、参加者が集まるかドキドキしながら広報しました。

天笠 群馬でもマスク等は準備していましたが、マスクを外している子どもたちへの気配りは難しかったですね。

森岡 私たちは各グループの班長に依頼して、チームワークをいかしつつ、班ごとにコロナ対策をしました。また事業の時間が長いと参加者は疲れた、飽きたと様々な表情を見せます。こ



群馬県青少年会館（群馬県）にて「みんなでつくってあそぼう」を2020年12月6日に開催（群馬県連合青年団）

れをどうするかが腕の見せ所でした。

——今後の事業実施にあたって心配な点はありませんか。

松田 参加者募集にあたって県内陸部で感染者が広がっており、盛岡市教育委員会の協力はあるものの、参加者が集まるかどうか心配です。

長谷川 スタッフの不足が大きいです。地元の短大生に協力を依頼していましたが、当日のスタッフがどうなるか。また、コロナ対策や屋内での接触も悩みです。

棚田 どの地域でもコロナ対策は重要ですね。また各班で子ども目はどう行き渡らせるか。山梨でも、兄弟げんかや杖を振り回す参加者など、青年には有り得ないことが次々起きました。

——既に事業を実施した地域に対して、周囲の方やスタッフの反応などはいかがでしたか。

天笠 子どもたちは楽しく過ごしていたと思います。また保護者から、こういう（野外体験の）機会を設けてもらいたいありがたい、という反応もあり、事業が期待されているなと感じます。

西村 事業後、参加者を保護者にお返しするまで、ずっとドキドキです。子どもたちが安心して飛び込んでいける年齢層のお兄さんお姉さんがいたことで、より楽しい場が持てました。また、自分たちもリーダーシップを発揮できる機会になりました。

森岡 子どもたちから「より友達同士の仲が深まった、仲良くなれた」と声をもらったとき、やって良かったなと思いました。

出席者

- 棚田 一論（日本青年団協議会事務局局長）
- 松田 恵美子（岩手県青年団協議会会長）
- 長谷川 綾（福島県連合青年会会長）
- 天笠 荘一（群馬県連合青年団団長）
- 森岡 千晴（高知県青年団協議会会長）
- 西村 ひかる（高知県青年団協議会副会長）

棚田 高知では大学生を上手く巻き込んでいますよね。

森岡 これまでも学生団体「学生合同なぶら」が青年団とタッグを組んでやってきましたが、これほどハマったことは初めて。彼ら彼女らのやりがいがあったからこそです。またコロナが一時的に下火だった部分も、大学生が参加するうえで大きかったです。

棚田 高知では団の規約を数年前に改正し、大学生もうまく団体の内部に取り込めるようにしてきました。福島ではどのようにスタッフ募集を呼び掛けたのですか。

長谷川 今回初めて私から地元の短大に声掛けし、短大生に力を借りることにしました。

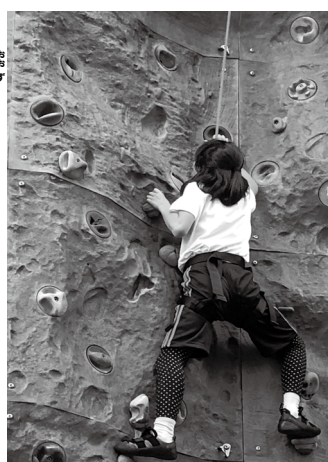
棚田 山梨事業では地元大学生に協力を得るうえで、謝金やバイトとの兼ね合いなどいくつか課題がありました。高知では、大学生に来てもらうために行ったことなどはありましたか。

森岡 教育学部で学ぶ先生の卵に向けて「実践してみませんか」と持ちかけて参加してもらったり。いまま試行錯誤中です。

棚田 この方法は、どの地域でも活用できそうですね。

——事業を通じて、次年度以降に向けた動きを行っていますか。

森岡 先日、高校生向けにキャンプ事業を行った際、学校外で同級生らと接する経験が普段から少ないのではないかと感じました。今回、現場で違う背景のスタッフ同士が出会い



国立大洲青少年交流の家（愛媛県）にて「文科省自然体験キャンプ」を2020年10月31日から11月1日にかけて開催（高知県青年団協議会）

取り組んで、充実し

社会教育士教育実習生から一言



中後 莉紗 ちゅうご・りさ。千葉県出身。法政大学文学部英文学専攻3年次在籍中。19・20世紀のアメリカ文学を学びつつ資格取得のため日本青年団協議会で実習。趣味は音楽鑑賞で、新型コロナ以前はコンサートのための旅行、最近は卒業論文の作品を選ぶための読書。

大学入学時に社会教育主事がどんな資格かと興味を持ち、社会教育士の資格取得をめざして実習生として山梨県での事業に参加しました。子ども対象の事業は遊び要素が強くなるため、初めのうちは遊び要素は困難と考えていました。しかし実際には、子どもには些細なことでも新発見であり、新たな事柄に触れる機会や交友関係をつくる場の役割をこの事業が果たしていると感じました。また2回目の事業で、一部のプログラムの企画を私に任せられました。初回事業の反省を元に内容案を考え、さらにその企画を子どもにどう伝えれば良いか、楽しんでもらえるかと検討し工夫しました。とても難しかったものの、ゲーム中の楽しげな子どもの笑顔にとっても嬉しい気持ちになり、やり甲斐を感じました。この事業に参加し、誰かに機会を提供する役割の必要性を学びました。今後はあらゆる機会を自分事として捉え積極的に参加し、そして機会をつくる役割を担っていきたくて考えています。

たのではないのでしょうか。——これまで各県の青年団では子ども事業を行っていたのでしょうか。天笠 群馬では親子対象でかつてスキーバス事業をやっていました。子どもたちは活発でリーダーもやっていたけれど、青年団にはつながりませんでした。しかし子ども対象の事業は、うまくできれば主催者側も楽しめるものです。森岡 高知では出張サンタ事業がありました。ここから子どもたちに喜んでもらうのがよいと気づき、県内各地で子ども対象事業を進めてきました。カッコいいところを見せようなど、やり甲斐を若いメンバーが得

たものになりました。来年も同様の事業をやりたいです。西村) 委託事業という枠組みも含めて、子どもたちとの楽しい場や青年による実践の場を実現していきたいです。また、他の地域の青年団とも協力したいですね。森岡) 今回私たちは講師に一部プログラムを任せ、自分たちの手から放しました。また、楽しく子ども向け事業をするコツを編み出しました。集合が遅い子どもたちには「5秒前」など焦らせるのも一つの案です(笑) 子どもたちが真剣な顔で走って集合してくれます。天笠) 次年度以降については現段階ではまだ白紙ですね、移動がネックで。現地集合・現地解散も考えられますが、バス移動の最中もプログラムの一部と考えると、それは面白くない。長谷川) 今年やってみて次年度以降のことを考えたいですが、できるならやりたいです。松田) スキー教室だと、講師を呼ぶため参加費無料は厳しいので、どうすれば良いか検討していきたいです。県内の仲間と相談しながら考えていきます。棚田) 今後にかけるヒントが出てきましたね。みなさんぜひ

——すでに事業を終えられたところで、事業の前後で印象や見方が変わった点がありますか。天笠) 当初から参加しない子に向けて、どう参加を求めるかが課題でした。群馬県全県の小中学校にチラシを送付してみたところ、高崎市や、遠くは嬬恋村からの参加があり、挑戦してみることが大事だと実感しました。西村) 子どもの反応はとても素直で、自分たちの興味ある時や疲れた時のテンションなど様々で、悩み続けた一泊二日でした。先ほどあったようにゲーム形式にしたら上手くいったこともあります。また上級生が年下の面倒を見てくれて、驚きましたね。森岡) コミュニケーションですね。出会ってすぐに子どもたちの扉が閉じていくシャットダウン感を感じましたが、諦めずにいけば、だんだんと心を開いてくれるということを学びました。事業に参加したときと、事業後半では子どもたちの顔や行動は全然違うんです。一緒に何かをやる時間が、仲良くなるために大事でした。棚田) 逆に、大学生スタッフの変化がありましたか。森岡) 普段クールなみなさんなのに、なんとか子供たちをまとめないとイケない、と頼もしかったです。彼ら自身も鍛えられたのではないのでしょうか。——これまで各県の青年団では子ども事業を行っていたのでしょうか。天笠) 群馬では親子対象でかつてスキーバス事業をやっていました。子どもたちは活発でリーダーもやっていたけれど、青年団にはつながりませんでした。しかし子ども対象の事業は、うまくできれば主催者側も楽しめるものです。森岡) 高知では出張サンタ事業がありました。ここから子どもたちに喜んでもらうのがよいと気づき、県内各地で子ども対象事業を進めてきました。カッコいいところを見せようなど、やり甲斐を若いメンバーが得

対談後の委託事業

対談後、新型コロナの感染はますます拡大し、1月8日に1都3県を対象とする政府の緊急事態宣言が発出された。これを受けた委託事業の現状は以下の通り。

<岩手県>	1月23日	→中止
<福島県>	2月20日、21日	→実施
<栃木県>	2月11日	→中止
<山梨県>	1月23日、24日	→延期
<滋賀県>	2月20日	→中止

(2021年1月4日 開催)

松田) こまできたら全力でやるしかありません。頑張ります。棚田) みなさん、お忙しいところありがとうございます。天笠) みなさん、子ども事業をやってみましょう。事業を通じて青年団としての意義を再確認したいですね。長谷川) 福島では応募がこれからですが、かつての私のように子どもたちは楽しいもの、楽しいところが集まってきました。これを実現できるように取り組んでいきます。松田) こまできたら全力でやるしかありません。頑張ります。棚田) みなさん、お忙しいところありがとうございます。天笠) みなさん、子ども事業をやってみましょう。事業を通じて青年団としての意義を再確認したいですね。長谷川) 福島では応募がこれからですが、かつての私のように子どもたちは楽しいもの、楽しいところが集まってきました。これを実現できるように取り組んでいきます。



鹿沼市自然体験交流センターほか(栃木県)にて「遅れてきた夏休み」を2020年11月22日に開催(栃木県連合青年団)

西村) 私たち自身にも学びが多くあります。地域を超えて意見交換やアドバイスをし合いながら進め、学び合いながら取り組ましましょう。森岡) 大変な点も多くありますが、コロナによって子ども事業という共通体験で全国のみなさんとつながり、集まる機会があつて良かったです。頑張りましょう。天笠) みなさん、子ども事業をやってみましょう。事業を通じて青年団としての意義を再確認したいですね。長谷川) 福島では応募がこれからですが、かつての私のように子どもたちは楽しいもの、楽しいところが集まってきました。これを実現できるように取り組んでいきます。松田) こまできたら全力でやるしかありません。頑張ります。棚田) みなさん、お忙しいところありがとうございます。天笠) みなさん、子ども事業をやってみましょう。事業を通じて青年団としての意義を再確認したいですね。長谷川) 福島では応募がこれからですが、かつての私のように子どもたちは楽しいもの、楽しいところが集まってきました。これを実現できるように取り組んでいきます。

子どもの学びを「協働」で創る

— 未来につながる青年たちの勇気 —

丹間 康仁

「二人の子どもを育てるには、村じゅうみんなの力が必要だ」

これはアフリカに古くから伝わることわざです。少子化と核家族化が進む日本でも大切にしたい考え方だと言えます。子育ては親だけで抱え込むものではありません。子どもの学びは先生だけに任せきりでもいけません。そもそも人間は、他者との関係の中で学び育つ存在です。教育において親と先生が重要な存在であることは確かですが、そこに地域も参画し、子どもが成長する時間と空間に多様な大人がそれぞれの角度で関わっていく。そうした環境をつくることで人間の学び育つ可能性を広げます。

近年、学校・家庭・地域の「協働」が求められています。「協



【プロフィール】

たんま・やすひと。博士（教育学）。千葉大学教育学部准教授。社会教育学を専門とし、地域と学校や住民と行政など異なる立場間の「協働」が研究テーマ。各地で進む学校統廃合や公民館再生の動きに注目しながら、少子高齢化下の地域教育の仕組みを探究する。

働」は「協力して働く」という狭い意味でもなければ、同じ目的で同じ活動を進めるという考え方もありません。「ドウ」の漢字が「同」ではないことがポイントです。協働とは、互いの立場や特性に違いがあることを認め合い、むしろその差を積極的にかし合うことで、単独では実現できない結果を生み出すとする考え方です。「協働」で子どもの学びをつくらうとする際、互いの理解や情報共有を進めて、「子どものため」という部分に共通軸を見出しつつも、取り組みに関わる目的や理由は組織や団体で違ってよいのです。大人が一丸とならず、多角形の立ち位置で「協働」の関係構築が大切です。

地域は一枚岩ではありません

ん。地域こそ多様な大人がそれぞれの考え方と生き方で暮らす社会の舞台です。あることを正しいという大人もいれば間違っているという大人もいる。答えを子どもと一緒に悩んでくれる先輩もいる。仮に大人がみな同じ姿勢で子どもに近づけば、子どもはかえって息苦しくなります。そこで、学校や家庭とともに地域の団体と組織が互いの立場と特性を学び合い、互いの違いを積極的にいかして学び育む計画を練り上げる話し合いが必要で、自ら問いを立て、仲間との対話や地域との関わりを通して正解のない問いに向き合うことは、子どもにとっても大人にとっても、そして青年にとっても自身の成長につながります。

直近ではコロナ禍にどう向き合うかが最大の問いでした。本号で特集された子どもの自然体験活動の実現は、青年たちがこの問いに向き合い「子どものため」に取り組んだ事業です。「コロナだからできない」ではなく「コロナだけ工夫してやろう」としてくれた」という青年たちの勇気と想いは、参加した子どもたちにも伝わります。この災禍に向き合い、次の世代を力強く生き抜ける子どもを多角形の「協働」で育てていくことが重要です。

あの日・あの時・あの場所で

全国の青年団の活動をクイズでご紹介！青年団ならではの活動やそのエピソードを、写真とともにお届けします。是非みなさんの活動の参考にしてください！

※答えは右記のQRコード（日本青年団協議会 Facebook）から→



毎年福井県で開催される若越青年大会体育部門の交流運動会は、福井県独自の種目競技を行います。この写真はその一コマです。今年はコロナ禍中の開催のため、消毒や検温を徹底し、通常の競技とは異なる非接触型競技を考え、全6種目を実施いたしました。さて、その内2種目の競技名はなんでしょう？写真を見てお答え下さい。ヒントは名前に三密回避における重要な距離の名前が入ります！（福井県 福井県連合青年団より出題）



この写真は2018年に行われた「第41回鳥人間コンテスト」の飛行テストの様子です。鳥取県連合青年団に加盟している琴浦町青年団の団員の「鳥人間コンテストに出場してみたい！」という声がかきつけとなり、みんな初体験でしたが協力して完成させました。さて、結果はどうだったでしょう？ヒント、答えは2文字です。エントリーにあたり、滋賀県青年団体連合会にもご協力をいただきました。ありがとうございました！（鳥取県 鳥取県連合青年団より出題）

コロナ禍ということもありオンライン対談を実施した。



日本青年団協議会会長 中園 謙二
1980年6月16日生まれ。岡山県倉敷市在住。2008年に岡山県青年団協議会へ入会し、2年後に同会会長就任。2015年に日本青年団協議会役員を経て、2020年より同会会長。2月7日「北方領土の日」に開催された令和3年北方領土返還要求全国大会では、実行委員長を務め、北方四島返還に向けて力強く挨拶した。

株式会社ヤクルト球団広報部 三輪 正義氏

みわ・まさよし。1984年1月23日生まれ。山口県立下関中央工業を卒業後、山口産業株式会社で軟式野球を経験。その後、2005年に四国アイランドリーグ香川に入り、2007年ヤクルトスワローズにドラフト6巡目で指名を受け入団。2018年に独立リーグ初のFA権を取得。2019年を現役引退。引退セレモニーでは雨の中のヘッドスライディングで締めくくった。現在はヤクルト球団広報部に在籍。



「向き合う」ことの大切さ 失敗から学んだ僕の人生

社会の様々な問題に対して最前線で取り組む人と、地域を中心としたテーマについて語り合っていく本企画。青年団の館である日本青年館の目の前に明治神宮球場が外苑地区を見守るようにどっしりと構えている。その球場をホームグラウンドとして活躍する東京ヤクルトスワローズは、外苑地区のヒーロー的存在だ。今号ではそのヤクルトスワローズで12年奮闘し、2019年に惜しまれつつ現役を引退して、現在はヤクルト球団広報部として奔走される三輪正義氏にお話を伺う。

「失敗」を自分の中で咀嚼する

(中園) 現役時代に送りバントを失敗してすぐ叱られた、という記事を拝見しました。

(三輪) プロ2年目の時、オープン戦でバントの指示がありました。その時の僕の立場は2軍にずっといた選手で「これから1軍に上がっていかなくないかな」という大事な場面でした。レギュラーではないので送りバントやエラーをしない等の細かいところもきちんとやらなければいけません。今考えると、野球なので失敗することも成功することも当然あります。でも、当時の僕が「様々な状況に備えて練習できていたか」と言っていると、準備できていなかった。失敗して「お前みたいな選手は、細かいことができないから生かす必要はないんだ」と叱られました。言われたことを改めて自分の中で考えてみると確かにその通りで、当然失敗するよな、と。プロ1

2年目には「周りにいていくのがやっと」というのもありました。叱られたその時から「自分はもうどうしたら生き残れるか」を考えるようになりました。また、自分のことだけじゃなく、周りを見ながら「自分は何を求められているのか」「今のチームではどういう選手が重宝されるのか」「監督がどういうことを考えているのか」ということを自分なりにものごとく考えました。

(中園) 相手や周りがあることを求めているか、考えるのは青年団活動の中でもとても大事なことだと思います。

活躍の場を増やす

(三輪) やっぱバントが成功するのは当然で、さらに内野も外野もいろんな所を守れなくないかなのです。「このポジションでもできるか」と聞かれた時、「できます」と答えることができるよう準備(練習)しました。「キヤッチャーをできるか」と聞かれ、キヤッチャー経験は小学校のソフトボール以来でしたが、「できます」と答えましたね。

人生の転機

(三輪) そこから、少しずつプロリーグで生き残る道が拓けてきました。もしあの時バントを成功させていたら「よく成功した」と褒められ、失敗についてそこまで考えず、そのままプロ野球生活を送ってもっと早く引退していたかもしれませ

ん。失敗して叱られたことで自分の考えを改める

ことができ、自分がどう動くべきかを考えることにもなり、僕にとつていい経験になったと思います。プロを12年間やってきて、フリーエージェントという一部の選手しか取れない権利を獲得しました。今思うと、あの時が転機だったのかもしれない。」「どうやって残れるのか、相手が何を考えているのか、そのために何を準備しないといけないのか」すごく考えました。

(中園) 送りバントはどんな人でも失敗することがありますよね。でも、1つの失敗と向き合い、その失敗を感じることができて、率直にすごいと思いました。自分自身が活躍するチャンスを取りにくい姿勢がすごく大事ななと感じます。

(紙面での紹介はここまで。三輪さんと中園会長の対談の続きは日青協FB等で紹介します。左記QRコードをチェックしてみてください)



つづきは↑こちら

天然ガスがひらく未来



天然ガスは、クリーン性に優れた環境負荷の少ないエネルギーです。

天然ガスはメタンを主成分とし、不純物を含まないクリーンなエネルギーです。大気汚染や酸性雨、地球温暖化の原因ともいわれる窒素酸化物(NOx)や二酸化炭素(CO2)の排出量も少なく、環境保全に貢献する、地球にやさしいエネルギーです。

<http://www.tokyo-gas.co.jp/>

エネルギー・フロンティア TOKYO GAS



違いを認め育む

西村 美東士 氏

(若者文化研究所代表)

本連載ではこれまで、社会教育の分野で活躍されている人とのコラボを行い、社会教育・青年教育・公民館の必要性を訴えてきた。連載最終号となる本号では、若者文化研究所代表の西村美東士氏にこれまでの連載を踏まえて、地域活動やまちづくりの推進において若者や行政、それぞれの立場からどのようにコラボするのかまとめていただいた。



にしむら・みとし。若者文化研究所代表。東京大学教育学部卒業後、東京都社会教育主事として青年の家勤務。その後、国立社会教育研修所を経て、平成30年4月に聖徳大学教授を退職。退職後は、板橋区社会教育指導員として、中高生の居場所づくりを実践してきた。専門は社会教育学、青少年教育学。

社会教育とは、人々の暮らしたことに根ざし、学び、共に支え合う一人ひとりの自治活動です。青年団は、地域や社会への視野の拡大を促し、若者を育てる社会教育の重要な役割を担っています。本特集第1回で、近藤氏は「地域リーダーのインキュベーター」としての役割を青年団に期待し、第2回の小山氏は青年団の経験を生かした地域住民を巻き込む町長として実践にふれていました。

野市の「生涯学習推進基本構想」では、市民アンケートから①「地域で自分を生かしたい」、②「自分を打ち出したい」、③「地域に生きる」、④「自分を見つめたい」の4つの地域活動の傾向を抽出しました。そこで、①には「まちづくり活動×ニューの提供」、②には「自己診断カルテの作成」、③には「地域を知る機会や多世代交流の場の提供」、④には「居場所・出会いの場の提供」を提唱しました。生涯学習やまちづくりの推進においては、そのように意図し、意識化することで青年団活動に大きな転換をもたらすと思えます。私たち青年はお互いに自分らしさを認め合い、支え合い、はぐくみあう、という多様性の時代に生きているのです。

青年団は、社会教育としての特質をいくつももっています。青年団を通じた地域の仲間づくり、活動を通じた地域・社会への参画、新しいビジネスモデルの創造、生きる楽しみの創造と交流。これらが盛り込まれた活動は個人の枠組にとじこもらず、周囲や社会との関係づくりを促しています。しかし、一般的には社会教育が軽視され、青年団活動は衰退しつつあると言われることもあります。

日本青年団協議会主催の全国青年問題研究会(以下、全国青研)では「目の前にいる相手の表情や声色、雰囲気を感じ取って相手の気持ちを思いやりながら行う語り合い」の重要性が受け継がれてきました。一方、行政との連携においては、活動の「まちづくり」につながる公共的意義を示す必要があると考えています。そのためには、行政のメカニズムを理解して、きっかけを提供することが肝心です。

また、今まで全国青研に参加した青年団員のなかには、自己啓発本を読み「仕事、子育て、青年団(会)などそれぞれの場所で居場所としてバランスよく楽しんできた」人が、県の充て職などの動員に振り回された末、「自分の身の振り方で周りの人生をかき乱すのに疲れた」という悩みやギャップを抱えることもありました。団員個人の生き方を犠牲にする活動は、今日の社会に馴染まなくなってきました。青年団は、今日、個人の多様性を認める数少ない場です。個人を尊重した上での他者との出会いと参画・協働こそが、世界を広げ、自己啓発本以上の効果をもたらすと考えています。

以前、関わった栃木県佐

野市の「生涯学習推進基本構想」では、市民アンケートから①「地域で自分を生かしたい」、②「自分を打ち出したい」、③「地域に生きる」、④「自分を見つめたい」の4つの地域活動の傾向を抽出しました。そこで、①には「まちづくり活動×ニューの提供」、②には「自己診断カルテの作成」、③には「地域を知る機会や多世代交流の場の提供」、④には「居場所・出会いの場の提供」を提唱しました。生涯学習やまちづくりの推進においては、そのように意図し、意識化することで青年団活動に大きな転換をもたらすと思えます。私たち青年はお互いに自分らしさを認め合い、支え合い、はぐくみあう、という多様性の時代に生きているのです。

本連載はこれで終了となります。一年間ありがとうございました。(編集部)

月刊

社会教育

毎月17日発売!

創刊1957年。実践家と研究者による市民のための社会教育総合誌。公共施設や教育施設における社会教育は、いまどうあるべきか。毎月幅広いテーマで社会教育の在り方を見つめます。

定価：本体741円＋税



日本青年館ホール

私たちは1921年以来、一貫して日本の社会教育、全国の青年団を応援しています。

お問合せ：株式会社ニッセイまで「日本青年館ホール」で検索!



記録の振り返りから
地域の振り返りへ

私たちは忘れない。戦後未曾有の災害と歴史に名を遺した東日本大震災は数多の、そして青年団員の尊い命と日常を奪ったことを。日青協は震災直後から全国の仲間と共に現地ボランティアを派遣し、また不足する物資を支援してきた。そして、震災の記憶を風化させない取り組みを続けながら、被災した青年のその後の生活記録を冊子「生きる」として綴り、6冊目を今春発刊する。

2020年3月、福島第一原発事故の影響で不通だった福島県内のJR常磐線が全線復旧し、9年ぶりに福島県浜通りを貫く一本の鉄路が開通した。ハード面の復興は時間の流れとともに少しずつ進むことを感じさせる。かたや心の復興とも言えるソフト面の復興はどうだろうか。住み慣れた土地や仲間を失った喪失感や息

が詰まるほどの記憶や心の傷跡は、数年で消えることはなく悠久の時を経てくすぶりが続ける。個々の心の準備が整ったとき、ようやく復興に向けた歩みが始まる。以降の激甚災害にあっても、被災地域ごとのコミュニティは激変し、被災者はそれまでと何かが異なる生活を始める。新天地を求め地元を離れるか、自宅や生活環境を再建しその地に留まるか。相次ぐ自然災害は、私たちに自分の生活や気持ちを見直す機会を否応なくもたらした。これを自分の言葉で記し、伝え続けることが生活記録の役割であり、遠く離れた仲間も記録を読みながらその想いを分かち合える。そして災害を通じて地元のこと、仲間に想いを馳せられるのだ。

節目の年を迎えた東日本大震災。いま一度、仲間や家族と共にあの日を振り返ってみよう。

コロナに
負けんじん
きばっど!!!



「ダーツ仲間に「フットサルをやるう」と誘われて鹿児島県青年大会に出場した段下さん。最初は億劫だと感じていたが、いざ出場してみると他部門で発表していた島津太鼓の迫力に圧倒され、入団を決意した。しかし、太鼓以外の活動や会議もあることを知ると、再び憂鬱な気持ちが押し寄せた。ところが、実際に活動してみると、事業について話し合うことは未知の経験であり容易ではないものの、子どもたちの笑顔を見ると達成感に包まれ夢中になった。団長就任の年に新型コロナウイルス感染症が地元を襲ったが、不安がる団員一人ひとりに段下さん自ら「活動を続けよう」と説得。

「感染させない環境づくりを地道に続け、少しずつ団員たちも活動に出てくるようになった。努力が功を奏し、今では活動で関わった多くの人の笑顔を見ることができ、制限ある生活のストレス発散につながる団員もいる。現在は自粛中だが、活動の後には元氣すぎる団員との飲み会が恒例だった。酒豪に囲まれる中、段下さん自身はお酒があまり得意ではないが、団員と心を通わせ、子どもの喜び表情を思い出すと心が弾む。段下さんは当初の気持ちとは裏腹に、「難しいからこそ挑戦し甲斐がある」と活動について力強く語る。彼がいることで、町中に笑顔が広がっていく。



めんどうさいから、
やりがい人 (鹿角島島民)

段下 利彦さん (24)
(野田町青年団団長)

編集後記

早いもので春の足音が近づいてきました。最近、インドの大ヒット映画「きっと、うまくいく」を観ました。インド映画は別名「マサラムービー」と呼ばれているようです。マサラとはミックススパイスのことで、笑って、泣けて、社会問題にまで切り込んでいく…まさにマサラてんこ盛りの映画でした。

人生うまくいくことばかりではありませんが、たまには肩の力を抜いて春の陽気に包まれる…そんな日があっても良いですね(か)

みんなで戻るふるさとへ みんなが伝える北方四島



2月7日「北方領土の日」に東京・LINE CUBE SHIBUYA (渋谷公会堂)にて、官・民で構成される北方領土返還要求運動全国大会実行委員会が「令和3年北方領土返還要求全国大会」を開催した。新型コロナウイルス感染症の感染予防対策のため、会場内は無観客とし、新たな試みとして全国各地をオンラインでつなぎ、その様子をYouTube配信することで国内外に幅広く訴えた。

第1部では、北海道根室市の元島民が北方四島での暮らし・ふるさとの思い出を振り返り、四島の自然豊かな景色の写真を紹介した。また、会場では後継者である2世・3世に語り継がれた事実や「元氣なうちにふるさとへ戻りたい」という家族の気持ちが訴えられた。第2部では沖縄県や高知県、富山県の小中高生からも、各自の活動や北方領土返還にかけた想いが共有された。菅首相のメッセージをはじめ、運動団体や根室市長からも言葉が寄せられ、日本全体で領土問題解決に向けて取り組んでいくことが確認された。

全国大会の開催は40回目となり、現在元島民の数は6,000人を切り、平均年齢は86歳となる。一日も早く四島が還り、ふるさとを追われた元島民や次世代の子どもたちが自由にふるさとへ行き来できるよう、私たち青年も返還に向けて地元でできることは何か、考えていこう。



最新の情報はこちらに
<https://dan.or.jp>